

お伽五重の塔

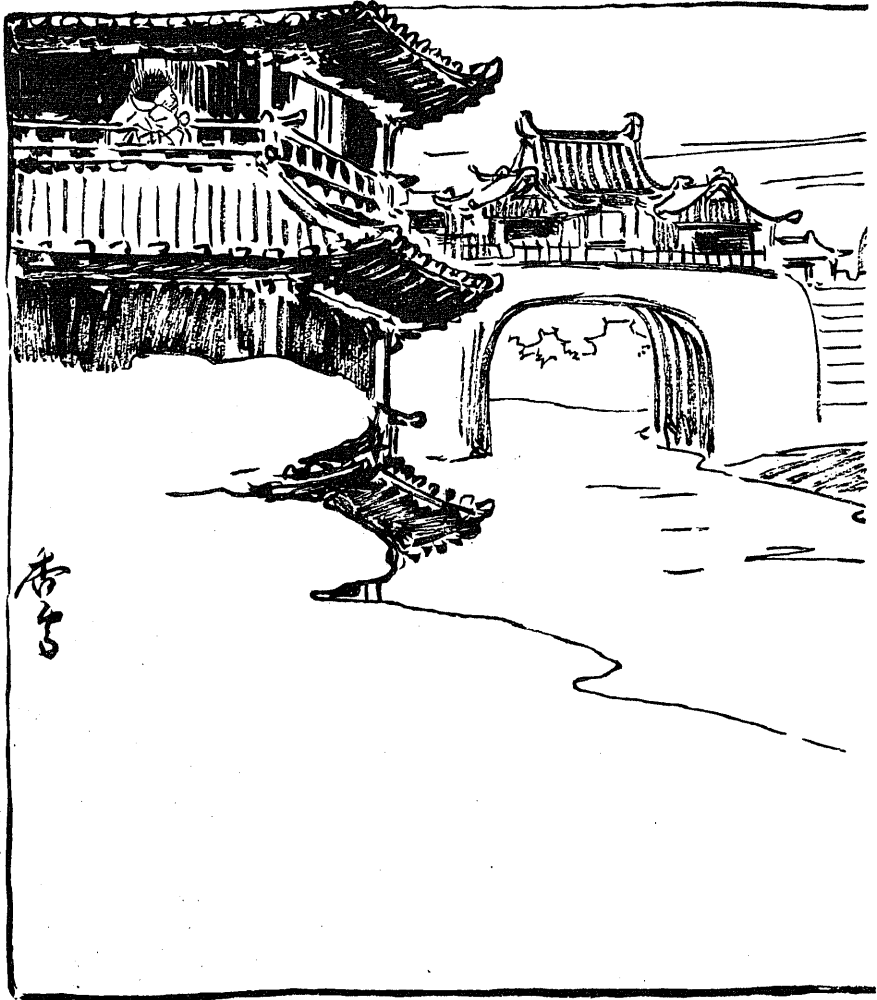
小寺彌彦

昔しある國に一人の大男がおりましたそれは、とても大きいこと、とてもあたり前の御うちでは天井へつかへて入る事が出来ず其上大そうな力持ちですから大概なかうちのねだもぬけるので其人は仕方なしあちこちと廣い野原をおうちとして居ました。

何しろあまり大きいので、何か氣に入らない事でもあつてあばれたすと、誰もどうする事も出来ず固



つてしまふのです、
それ故其國の王様は
とう／＼其大男を國
から追出してしまひ
ました。大男は追ひ
出されたものですが
仕方なくぶら／＼
隣り國へと出掛けて
行きました。がもをお
ひる近くもなつたの
でおなかすいて來
ました。處が丁度百
姓家の前に牛が一匹
居ましたのでこれを
つかまへてお料理を
しておいしい／＼と
いつてとう／＼から
だいけ皆んなたべて
しまひ、頭を肩にか
ついで又ぶら／＼と



あるき出ししました。
冬とは云へよいお天氣にお腹をくちくしてあるき
ましたので少しねむくなりましたから道ばたの太
い木の上にあがつてまづどつこいしよとひるねを
はじめました。

心持ちよくうとくして居りますとどこがて大層
にぎやかな話し聲がして面白さうな笑聲も聞えま
すのでふと首をあげて見ますと自分の居る木の
下に見るも可愛らしい兎や美しい雉子や赤い顔の
猿などが大勢あつまりいろくくの御馳走をならべ
てお酒盛りの最中ですが、あまりの面白さに我を忘
れのびわがつて枝の間から首を出し見とれながら
「あゝいかに面白さうだそれにあのぢさうの

おいしさうな事たべたいものだな」

と云ひながら大きなからだを一つゆすぶりました
ので其拍子に後においた牛の首が枝の間からこ
ろくところがりお酒盛のまんなかへ落ちて行きま
した。

さあ下ではびつくり仰天

「兎、おや、大變、之はまあなんだらう」

婦子「兎さんこわいものが落ちて来ましたね」

猿「ヤ、牛だ大きな牛の首だどこから落ちて来た

のだらふ」

と赤いお猿が青くなり白い兎が赤くなり、その驚
き様があまりのおかしさに大男は思はず笑ひまし
た。其聲がまるで雷のひやくやうなので下の者ど
も驚くまい事か

一回「そーら大變だ」

と第一にかけ出す猿腰をぬかしてまどくする雉
子、とる者も取りあえず皆一目散に林の奥へとに
げていつてしまいました。

そこで大男はのそりくくと木をかりて来て見ます
と中々の御ちそう、まづ片はしから平げてしま
ましたのでまた出掛けやうとしますと足下に一つ
の小さな金の箱があります。何心なく手にとつて
見ますと箱の表に「何んでも望み次第とかいてあ
ります」

大男「やあ、之は面白い」「何んでも望み次第」と書

いてあるさつきから御馳走許りたべたのでの
どがかわいていけないかいしい御茶がほしい

ものだ「御茶出ろ〜」

よ小聲に云ひました處まわ不思議山吹色をした御茶が目の前へ出ましたので大男は又其御茶をたくさん呑みやれ之でよかつたどつこつしいしよと又あるき出してやがて二三丁も歩いたと思ふと向ふから一人の旅人が来ました。

旅人「もし〜大きな御方は何をして方々を旅商する者ですが今私は此に一つ珍らしいものを持つて居ります此杖は人の云ふ事をよく聞わかるのですが之を買つて下さいませんか」と云ひました。

大男「買つてあげたくも私は御金がありませんが今あたしも此に面白い箱を一つ持つて居ます此箱に向つて自分のほしいと思ふ物を云ふとすぐそれが出て来ます之れでよければ取りかへつこしませう」

と相談が出来て杖をもらひました。さて二三間あるいて考へて見ますといかにも箱がかしくてたまりませんそこで杖に「あの箱とり返せ〜と」

云ひつけました處杖は大男の手を離れ一目散にかけいつて商人の箱をどし〜と返して来ました商人はびつくりして一生懸命追つかけて来ましたが大男にはとてもかなはず見る〜一丁も三丁も離れてしまひました。

箱と杖を持つた大男は喜び勇んで〜やつて来ますと向ふからいろ〜獸の皮を持つた人が来まして其皮を一枚買つてくれと申しますので又さつきの箱を出してやりますと皮屋の申すのに

「之は世界に二つとない貴い皮なのですそれは此皮をふるいなから「雨降れ〜」と云ふとすぐざあ〜大雨を降らせられます」

と教へてくれましたので大男も箱からは何でも出る事を話して二人東と西に分れましたが大男はどうしても箱がほしくてたまりませ又杖に云ひつけて商人から箱を取り返させて来ました。

やがて隣國も近くなり日も暮れ近くなりましたので道はたの石に腰をかけさつきの箱に頼んですきな色々の御馳走を出して貰ひ獨りに〜たべて居りました處へ向ふから一人の大工が道具箱をか

ついで來まして大男がぢぢさうをたべて居るのを見て

大工「もし、大きなお方さん大分御馳走があるではありませんかあたしも今隣り國へ仕事にいつての歸りがけですがおなかいすいてしかたがありませんが私にも少し御すわけて下さ

いませんか」
と頼みました大男はにこ／＼しながら

大男「大工さんさあ御遠慮なくたくさんたべて下さい此箱に頼めばあなたのすきなものはいくらでも出せますからさあ一所にたべませう」と快く御馳走をわけてくれますので大工も大喜びすきなものを澤山ぢぢさうになつて

大工「どうも御親切にいろ／＼ありがたうございしました何かあげたいのですが今仕事の歸りで何もありませんけれど此小さな金槌は誠に不思議なものなので地をた／＼とそこへ大きな五重の塔が出来ますあなたは人なみより大きな方故之で五重の塔を造しらへてそこへか住みなさるとよございますから之を一つあげ

ませう」と云つて小さな金槌をくれさつさといつてしまひました

さつきから三つ珍らしい物が出来ましたので急に國へ歸つて自分を追ひ出した玉様たちを驚かせて見たくなり今度はせつせと元の道へ歸り始めました。

大急ぎに急いだものですから夜の明けない中に王様の御城へとつきました。

そこで先第一に金槌で御門の前をた／＼さそこへ大きな五重の塔を作り其上に昇つてひるのつかれでぐつすとねこんでしまいました。

さて話しかはり王様やけらひだちは困り者の大男を追拂ひましたので、皆安心して居りますと、或朝のこと夜も明け近い頃御城の前あたりで大層な地ひいきがしました。けれど年よりだちの外は誰も知らずに夜の明けた自分門番が重い御門の戸をギーンとあけますとすぐ目の前に大きな塔がありますのでびつくりして早速おけらひの所へかけて行き

門番「あの太閤なものが御門の前にあります大きな塔が立つて居ます」

と大聲に知らせましたが

臣「門番御前ねばけてはいけないよ御門の前に塔などありやしないぢやないかよく目をわけて

見てごらん」

と笑つて居てはんと一と思つてくれませんが門番は一生懸命に

門番「イ、エはんと一ですうそと御思になるならい

らしてごらんなさいさあすぐに」

とせきたてますので御けらひも仕方なく來て見て是は大變、大きな五重の塔が一晚の中に出來上つて居ました、さすがの御家來もびつくり仰天して尙よく「あちこち見ますと一番上にすりを枕に大男がねて居ますので又びつくりし早速此事を王様に申上りましたが王様は大層御怒になつてすぐ大勢の兵隊をあつめて其大男を打とつてしまへとの事でした。今迄よい心持にねむつて居た大男は下でがや／＼さわぎますから何かしらと首をあげて見ますと大

勢の兵隊が手に／＼刀を持つて塔をこわしにかゝつて居るのです。

大男「皆さんおよしなさいよそんな事をすると大雨

を降らせませすよ」

と云つてすまして居ますので兵隊共は尙一生懸命エイ／＼と掛聲勇ましくこわして居ますので大男も少し心配し今の内早く追拂つてしまはなくてはと例の皮を出して

「大雨降れ／＼」

と云ひ乍ら皮を振りますと急に大粒の雨がどしどし降り出して強い／＼兵隊さんたちは目も何もあいて居られずとう／＼皆御城の御門の中へにげてしまひましたので大男も雨を降らすのをよしました。そばへ行つてこわし始めるとザー／＼降らせ、よすとすぐ止ので皆はくやしがりませすがどうする事も出來ず之を見ていらしつた王様は尙御腹立になつてこんだは弓の名人にい、つけ遠くから弓でいらせませました之には大男も困るかと思ひの外例の杖を取り出し「あの人打ち殺せ」といひます杖は一目散にかけて來て弓を持つた人をまかし

て又大男の所へかけて行きます。

王様もけらひ共も口惜くてたまらず、どうかした
 いと思つてもとてよかないませんで、こんだは
 兵糧せめにしやうと相談し、國中の兵隊をあつめ
 塔のまわりを幾重にも圍んで大男が食物をとり
 來られないやうにしました。

人並よりおなかのすく大男の事故けふは降参する
 かあしたはあやまるかと皆根氣よく待つて居ます
 王様もこんだこそ大男も困るであらうも生捕つ
 て來さうなものだと毎日く心待ちに待つていら
 つしやいました。

やがて十日もすぎ二十日もすぎ早や一月となりま
 したが、大男は下りやうともしませんので兵隊共
 は少しあきて來て、

甲 乙さん大男はさつとおなかイすいて歩くけな
 いのだらうよ」

乙 私共がこう大勢いてはこはくてとても下りて
 はこれれすまいよ」

丙 あたしは此間あの大男の爲にあなたが穴だら
 け凸凹にされました其かたきに下りて來たら

ひどい目に合せてやります」

など皆いろいろはさして居りますと

これを聞いた大男はのそり首を出し

大男皆さん毎日苦勞様ですなれといくら待つ

てもわたしは下へなど行きはしません此に此

通り御馳走の出る箱があるのですから」

と云ひながらいろく御馳走を出してさもおい

しさうに食べて見せますので兵隊共は驚くまい事

か怒るまい事かけれどもを手の出しやうもありま

せんので此事を大將から王様へ申上りましたので、

王様も残念乍らどうにも仕方なく兵隊共を返しお

となしくそこに暮して居ればも隣り國など行か

なくともよいとの事で大男萬歳となりましたと

さ。めでたし」

